

それぞれの最終楽章

助け合いの町で ⑤

医療で生活の邪魔をしない。私がいつも肝に銘じていることです。

診療所に赴任したのは30歳になる年の春。大きな病院から移り、田舎の地域にも「最高の医療を届けたい」と意気込んでいました。訪問診療で最初に出会ったのは、脊髄小脳変性症という神経の難病を患う昭さん。既に10年以上自宅での介護を受けながら生活していて、少し前からご飯が食べられなくなっていました。

私は「最高の医療を」と思いながら、昭さんに血液検査をしては、新しい薬を処方し点滴していました。ところがある日、私が点滴をしていると、後ろにいた奥さんがつぶやきました。「先生、もうあかんな……」。病院では言われたことのない、医療を否定する言葉に、驚きと怒りを覚えながら振り返ると、奥さんだけでなく家族や親戚、近所の方々がベッドを取り囲み、昭さんをじっと見ていました。湧いていた怒りは消え、病気がかりを診ていた自分分は、この場には不要な存在であるかのように感じました。

「生活を邪魔しない医療」こそ最高



永源寺診療所長 花戸貴司さん

1970年滋賀県生まれ。自治医科大学卒業。大学病院勤務などを経て、2000年から現職。著書に「最期も笑顔で」など。16年へき地の若手医師を顕彰する第3回やぶ医者大賞受賞。

昭さんは65歳。天寿にはまだ早いという思いもあり「なんとか寿命を延ばそう」とばかり考えていました。周りの人たちは、人生の幕を閉じようとしている「その人」を見ていたにもかかわらず、私は「病気」しか見ていなかったのです。今、自分が行っていることは本当に患者さんのためになっているのだろうか、医師の自己満足になってはいないだろうか。自問しました。

2日後、昭さんは自宅で息を引き取りました。満足して見送った家族を前に「このままでいいけない、自分が変わらなければならぬ」。私は、心の中でそう繰り返しました。「病気だけでなく、その人の人生を最期まで見続けよう。地域の人たちの思いをかなえるために自分自身が変わらう」。そう思うようにな

り、患者さんからたくさん話を聴くようになりました。病気以外にも、生活、家族、これからの人生のことも互いに話すようになりました。これからの人生のことは、ご飯が食べられなくなったらどうしたいか、人生の最終章をどのように迎えたいかを話すことです。死を語り合うことは決してタブーではなく、本人の希望をかなえるために必要なことだと対話を通じて気づきました。

病気になった時、その人の生活を支えるために、医療と介護のバランスが大切だと思います。介護が必要になった時には、できるだけ医療を控え、生活を支える介護に重点をおいた方が薬に生活ができます。それは決して医療を諦めることではなく、本人の希望をかなえ、より豊かに人生を送るために必要なこと。そんな生活を邪魔しない医療は「最高の医療」であると、今は確信しています。(構成・畑川剛毅) Ⅱ全6回

朝日新聞デジタルの医療サイト「アピタル」で、より詳しくご覧になれます。